

昨年11月にノルウェーで開かれた最終予選で1位となり、ミラノ・コルティナ・パラリンピックの出場を決めたパラアイスホッケー日本代表チーム。「ゴールデン世代」と呼ばれる若手と、ベテランが融合したチームを、コーチたちは「ハイブリッドチーム」と呼ぶ。

銀メダルを獲得した2010年のバンクーバー大会以降、直近の3大会のうち2大会で出場を伸ばすなど「暗黒時代」を経て、再び輝きを取り戻しつつある。背景には、若手の発掘や意識改革、チームを支えるベテランの姿があった。

最終予選2戦目のスロバキア戦では、終了直前まで1-2と配線の危機にあった。6チーム中2チームしか出場権を得られない中で、負けるとパラ出場がほぼ絶望的になる状況だった。ピンチを救ったのは、若手とベテラン勢の連携だった。

**20代と50台が** 残り1分5秒で、FW伊藤樹（20）が同点ゴール。その後、ベテラン三沢英司（52）は若手のFW鵜飼祥生（20）から声をかけられた。「英司さん、自分がバックをとったらダンプ（相手陣地のコーナー深くにバックを放り込むこと）するんで行ってください」

普段、口数が少ない若手の言葉が頼もしかった。

鵜飼がバックを放つと同時に、三沢は全力で敵陣に突っ込んだ。伊藤とともに相手にプレッシャーをかけ、バックを奪った伊藤がゴール前にパス。相手GKがはじいたところを主将の熊谷昌治（50）が右サイドへ回り込み決勝ゴールを決めた。残り1分から逆転勝利し、日本は、4チームが3勝1敗で並んだ最終戦でノルウェーに8-2で勝ち、パラ出場を決めた。



ベテランの（右から）三沢英司、須藤悟、吉川守=いずれも2025年7月19日、長野県岡谷市

これまで日本チームはベテラン勢が支えてきた。三沢の競技歴は約30年。最終予選に出場した吉川守（55）、須藤悟（55）らとともに今も現役だ。ここ十数年は成績低迷が続き、競った試合でも「また負けてしまうのでは」という感情が湧き、終盤に逆転されることが多かった。それを打ち破ったのが、若手選手だった。

スポーツ庁などが手がける選手発掘事業「J-STARプロジェクト」から育ったのが鵜飼、森崎天夢（20）、次世代の選手として期待される河原優星（16）たち。研究熱心な若手選手らは、外国人トップ選手の動きをユーチ



主力に育った若手の（右から）伊藤樹、森崎天夢、鵜飼祥生

を自らアップ。周りの選手たちにも呼びかけて、ベテランも若手も刺激し合いながら、個々の力が上がってきました。こんなチームに刺激され、かつてFWで活躍し、引退した堀江航（46）もゴールキーパーとして復帰しました。

ベテラン勢にとって、パラリンピックの出場経験は「一生の宝物」だという。今回の出場でパラ出場6大会目となる三沢は、初出場した1998年の長野大会で、観客から送られた拍手や会場の雰囲気がいまだ忘れられない。「純粋にスポーツとして応援してくれた。若い選手にも、あの雰囲気を味わわせてあげたい」

伊藤も「日本チームの強みは、ベテランと若手のコミュニケーションの良さ。われわれもパラ舞台を夢見て人生をかけてやってきた。憧れを持ってもらえるようなプレーをしたい」。

日本の初戦は3月7日午前（現地時間）、世界3位のチェコ戦。戦いが注目される。（吉田耕一郎）



相手選手を振り切り、ドリブルでゴールに迫る伊藤樹（手前）  
（右）2025年12月6日、東京辰巳アイスアリーナ、  
いずれも吉田耕一郎撮影

ユーブ動画で見てプレーを磨いた。

海外にホッケー留学した選手もいる。伊藤は、9歳の時に交通事故で脊髄を損傷。翌年からアイスホッケーを始めた。25年6月までの1年間は、奨学金を得て米国のパラアイスホッケーチームに所属した。米国選手と練習し、パックを扱う細かい技術や、スピードを身につけた。

### お互いに刺激

熊谷は常に「アスリート集団になろう」と言い続けてきた。家でのトレーニング動画